

令和元年6月17日現在

機関番号：12614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02635

研究課題名(和文) 人文・社会科学系論文での引用・解釈構造解明と論文作成支援のための教材化

研究課題名(英文) Teaching Materials on Expressions of Quotations and Interpretative Descriptions Found in Academic Papers of Human and Social Sciences

研究代表者

大島 弥生(Oshima, Yayoi)

東京海洋大学・学術研究院・教授

研究者番号：90293092

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：大学大学院において日本語で論文読解・論文作成を行う学習者に向けては、従来は調査や実験に基づく検証型の論文に頻出する用例を中心に教材が提供されてきた。しかし、実際に日本語で論文に取り組むのは、人文・社会科学系分野を専攻する学習者が多く、これらの分野の論文読解・作成支援のための例文集と段階的な教材が求められてきた。本研究では、従来、教材化の試みの乏しかった分野において、各分野(歴史学/経済学/地域研究分野/文学/経営学等)複数の論文の文章をコーパス化したうえで、頻出する文型・表現および談話展開を分類・整理し、それをもとに、母語・非母語の日本語学習者と教師に向けた教材を試作した結果を報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

分析の結果、試作した教材の特徴には以下の点がある。実際の複数分野の論文の実例をもとに表現を抽出し、用例が多様で、たとえば、論文の各構成要素(ムーブ)の典型的な用例のみならず、従来いわゆる用例として教材に取り上げられにくかった多様な表現(例：歴史的経緯を小括する表現)にも焦点を当てている。複数分野の論文の実例に基づくことから、たとえば、先行研究の引用のみならず、原典、史料、統計資料等の引用の用例を挙げ、近似の言語機能であっても、用例の多様性が理解しやすい。論文経験の豊富な大学院レベルの学習者のみならず、大学学部レベルや予備教育段階の学習者を想定した、段階的な用例の理解と練習を想定している。

研究成果の概要(英文)：To support Japanese learners' academic writing in the fields of fine arts and social sciences, we aim to show some tentative materials of sentence patterns which found in the corpuses of academic papers in the fields of history, economics, area studies, literature, management studies, and so on. These teaching materials have the following characteristics; 1) variation of examples based on the real papers from various academic fields enabled to show not only typical patterns, but also atypical ones seldom picked up in the previous teaching materials (e.g., interpretative descriptions of the utterances in the historical materials/ interim summary of historical backgrounds,) 2) coding on discourse-level moves clarified the various usages of the expression used in the different situations, 3) stepwise exercises targeted both for rather experienced native/ non-native Japanese writers of graduated schools and novice writers who are at the undergraduate/ preparatory-level as well.

研究分野：日本語教育

キーワード：アカデミック・ジャパニーズ アカデミック・ライティング 論文作成支援 論文読解支援 人文社会科学系 引用 解釈

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人文・社会科学系分野を専攻する留学生の比率は、全体の約6割を占めている。これらの分野では、日本語の論文を理解し、自らも日本語で執筆することへの要請も他分野に比較して高い。近年の大学教育グローバル化の潮流においては、理工系分野留学生・大学生に対しては、日本語よりもむしろ英語力の育成に重点が傾いている。そのため、日本語習得を通じて日本の社会文化を理解し、かつ日本の文化・知識を学んで各国への発信者となってくれる層として、人文・社会科学系の留学生、および母国で人文・社会系分野を学ぶ海外の日本語学習者の相対的重要度が増している。また、海外での日本研究者への支援は乏しく、彼らが日本語での学術的な発信・受信や学習者の研究指導を行う上で困難を抱えていることも、申請者らの過去の調査によってわかってきた。予備教育段階・初中級段階の次の学術レベル、すなわち論文の読解と作成のレベルで、日本語支援が一層求められている状況であった。

2. 研究の目的

国内外の日本語非母語話者 / 日本語母語話者の大学生・大学院生、およびその指導者へ向け、
< 人文・社会科学系分野の論文における引用・解釈構造の解明と表現の抽出 >、
< 人文・社会科学系の留学生・日本人学生のための論文読解・作成支援を目的とした教材作成とその実践の試行(引用・解釈構造を中心に)、完成教材の公開(紙媒体およびWeb化)とその実践の方法提案、ワークショップを中心とした国内外における参加型研修の実施 >を行う。それにより、従来手薄であった、論文の引用解釈構造部分に焦点を当てたアカデミック・リーディングとライティングの支援を充実させる。以上の2点を目的とした。

3. 研究の方法

これまで研究の乏しかった人文・社会科学系分野の学術論文を対象として日本語学としてのジャンル分析・談話分析を用いて研究を進めつつ、学術研究のみならず、成果の教育における応用・普及を同時に目指し、教材作成とその発信を行っていく。

4. 研究成果

IMRAD型の「実験・調査型」論文に比して、従来、ジャンル分析や精緻な教材化が相対的に進んでいなかった人文・社会科学系の論文について、特に資料引用・解釈部分の構造の解明を進めた。「資料分析型」論文における引用と解釈の表現の論理展開の連続体について、分析単位を細分化し、構成要素の抽出を行った。先行研究で「資料分析型」と認められた10論文において、「A 中立的引用文」「B 解釈的引用文」「C 引用解釈的叙述文」「D 解釈文」がどのような連続体となって表れるか、その機能とプロトタイプを示した。Aは資料の着目点を中立的立場から引用・提示し、Bは資料を論文筆者の立場から引用して解釈構造の軌道に乗せる。Cは資料との内容的関連性を持たせつつ論文の解釈構造の中で引用叙述し、Dは資料には一定の距離を置いて、読み手を論文の解釈構造の中に巻き込み、主張・結論へ導くといった機能があることを明らかにした。同時にA,B,C,Dの人文科学・社会科学での使用割合を示した(山本・二通 2015)。この結果をもとに、論文の冒頭章から最終章までの、構成要素とその文型・表現の抽出・分析を続行した。これらの分類は論文作成支援のための教材の骨格を成すものであり、これをもとに試作教材を作成した。比較のために、「資料分析型 質的データ援用型」論文以外にも「資料分析型 量的/量・質データ援用型」や「複合型」論文も、分析対象の論文及び例文の収集を進めた。同時に、研究成果を大学院生が口頭で発表する際の音声データを採取し、論文作成の前段階としての口頭発表の論理展開の在り様を記述した。また、教材・指導の方向性について国内外(中国・米国・セルビア等)の日本語教師や人文社会科学の研究者から意見聴取を行い、現行の指導方法での困難点や求められる教材や支援の在り方について情報収集を進め、その結果を試作教材へ反映させはじめた。

平成28年度には、人文・社会科学系分野の「資料解釈型」論文における引用・解釈の構造解明と教材原案の作成と教材使用の試行に向けて、以下の成果を得た。人文・社会科学系分野の「資料解釈型」論文については、冒頭章から最終章までの各段階での論理展開に則した引用・解釈の用いられ方を詳細に分析し、分類を進めた。「資料分析型」論文以外の構造型を持つ論文の引用解釈構造と表現類型との比較分析のために、「複合型」論文の一類型として「農業経済・漁業経済」分野の展開と引用・解釈の表現の分析を行い、文脈化・脱文脈化の表れについて、成果報告を行った。人文・社会科学系の海外の研究者との間での教材原案に対する意見聴取を行った。論文作成の前段階の社会科学系学生の口頭発表における引用・解釈等の表現使用の分析を引き続き行い、テキストデータの分類に着手した。引用を学ぶ基礎段階の学部1年生の資料に基づく小論文での表現を分析し、問題点を抽出した。対象となる論文のデータも、従来のものより分野(文学・歴史学・地域研究など)の数、本数ともに増やし、テキストデータ化と分析を進めてきた。

平成29年度においては、論文における引用/解釈の構成要素の抽出や展開パターンの記述をさらに進め、各ジャンル(歴史学/経済学/地域研究分野/文学/経営学等)の複数の論文の引用/解釈の諸段階における表れの分析を継続した。その中では、論文の各構成要素(ムーブ)の典型的な用例(例:研究目的や方法の提示、結果の提示、原因の考察等)のみならず、従来いわゆる用例として教材に取り上げられにくかった多様な表現(例:歴史的史料の引用を通じ

で史料中の人物の思考や感情をも表そうとする引用解釈的叙述の談話展開、歴史的経緯を小括する表現)に焦点を当てた。

また、比較対象として、口頭発表における引用/解釈の表れについて、母語話者・非母語話者大学院生の間での比較を行い、後者の何が問題点とみなされているかについて探究し、ポスターや雑誌論文として発表した。引用/解釈のライティングの入門期に当たる学部留学生の小論文指導においても、段階的に学べる教室活動の提案を行った。

同時に、これまでの先駆的な業績として引用の段階的な訓練のための教材を作成してこれら二通信子氏(室蘭工業大学非常勤講師)による講演会および参加型ワークショップを、平成30年2月17日に主に日本語教師を対象に行った。そこで教師が引用/解釈指導のどんな点を困難に感じているかを把握し、現在試作しつつある教材を提供してフィードバックを得る体制を整えた。また、人文・社会科学分野で論文作成指導を行っている専門分野の教員からも、ヒアリングを通じて文章展開や表現選択等についての示唆を得た。これらの成果を踏まえ、現在、引き続き、引用/解釈の段階的な指導のための教材の試作を続けた。

H30年度においては論文の構成要素の分析を引き続き行い(生天目・大島2019)、歴史学・国際政治学・地域研究分野の《資料分析型》論文15編(各分野5編)を対象に分類・抽出し、その中で歴史史料の引用に基づいた叙述・解釈の表現について、山本・二通(2015)と同様に、分類Aの「ト」を用いた中立的引用の割合が非常に少なく、Cの引用解釈的叙述文(「ト」を用いない引用)やDの解釈文が主体となることを指摘した。さらに、学習者が類例として参照するため用例提示として、大島・生天目(2018)で日本語教育の国際大会において、引用~解釈への談話展開を以下の4パターンに分けて図示し(統計資料の数値等から引用・解釈へ 調査結果から解釈へ 史料の引用から事例の原因や経緯等についての解釈へ 史料における人物の言語行動の引用から心的態度等についての解釈へ)、意見交換を行った。

また大島(2019)では、《資料分析型》論文における資料の引用と解釈の部分に頻出する談話展開と語彙とに着目し、作文や読解の練習のための用例提示の試案の一部を示し、用例をもとに練習する授業案を示した。まず、導入 引用 解釈 小括というユニットを示し、頻出する語と表現をさらに詳細化した表で例示した。人文社会科学系における例示に関して過度な単純化は避けられるべきではあるが、学習者が自己の専門分野での論文の特徴を把握するための手がかりとしての有用性があることを主張した。この教材と使用法試案はWebジャーナルに投稿しており、2019年中にはオープンアクセスとして公開される予定である(教材試案のWeb化)。また、引用の導入段階からの教材例を他の実践者に配布し、その使用事例からのフィードバックを教材の改善に活用した。さらにこれらの背景となる日本の大学・大学院におけるL2/L1アカデミック・ライティング指導の諸相について、関連研究会において概観を報告した。以上のような形で、これまでの研究成果を、教育実践者に向けて発信した。これらの成果をもとに、さらに参加型ワークショップを開催していく予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7 件)

< 2019 >

[雑誌論文]

資料分析型論文の史料引用における引用・解釈表現の特徴

歴史学/国際政治学/地域研究を対象に

著者名: 生天目知美、大島弥生

雑誌名: 専門日本語教育研究 巻: 20 ページ: 1-8 (査読あり)

[Web 雑誌論文(調査報告)]

人文社会科学系の資料分析型論文の指導のための試案

著者名: 大島弥生

アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 巻: 11 ページ: 校正中

< 2017 >

[雑誌論文]

工学分野のゼミにおいて指摘された 資料の引用・解釈に関する問題点とその特徴

留学生の口頭発表と質疑応答を事例として

著者名: 生天目知美・大島弥生

雑誌名: 専門日本語教育研究 巻: 19 ページ: 25-32 (査読あり)

< 2016 >

[雑誌論文]

データ複合型論文における統計資料および事例の解釈部分の構造と表現:

農業経済/漁業経済分野の論文を例に

著者名: 大島弥生

雑誌名: 専門日本語教育研究 巻: 18 ページ: 29-36 (査読有り)

[Web 雑誌論文(調査報告)]

中国の大学における卒業論文作成指導の過程からのアカデミック・ジャパニーズ教育への示唆

著者名：大島弥生・陳俊森・因京子・山路奈保子
雑誌名：アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 巻：8 ページ：28-36

[雑誌論文]

論文の「意図的ではない剽窃」の問題～モダリティの混同と解釈のない引用～

著者名：山本富美子

雑誌名：Global Communication 巻：6 ページ：117-132

< 2015 >

[雑誌論文]

論文の引用・解釈構造 人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究

著者名：山本富美子・二通信子

雑誌名：日本語教育 巻：160 ページ：94-109 (査読あり)

[学会発表](計 7 件)

< 2019 >

[学会発表]

資料分析型論文における 史料引用による叙述と解釈部分の構造と表現

- 歴史学 / 国際政治学 / 地域研究分野の論文を例に -

発表者名：大島弥生・生天目知美

学会等名：第 20 回専門日本語教育学会研究討論会 (専門日本語教育学会研究討論会誌 p.30 ~p.32)

< 2018 >

[学会発表]

日本の大学・大学院における L2/L1 アカデミック・ライティング指導の諸相

発表者名：大島弥生

学会等名：第 54 回お茶の水女子大学・日本言語文化学会 (招待講演)

[学会発表]

人文・社会科学系分野の資料分析型・複合型論文に頻出する表現の習得を支援するアカデミック・ライティング教材試案

発表者名：大島弥生・生天目知美

学会等名：ICJLE ベネチア日本語教育国際研究大会

[学会発表]

アカデミックライティング入門期における資料の利用と引用についての指導

発表者名：二通信子

学会等名：引用指導についての講演 & ワークショップ (招待講演)

[学会発表]

ゼミの口頭発表における数量的データ提示・解釈の表現

- 工学系ゼミにおける日本人学生と留学生の比較 -

発表者名：生天目知美

学会等名：第 50 回日本語教育方法研究会 (日本語教育方法研究会会誌 Vol.24 No.2 pp.48-49)

< 2017 >

[学会発表]

引用を学ぶ基礎段階での学部留学生への指導

専門分野関連の学術記事からの遡り型授業設計の提案

発表者名：大島弥生

学会等名：2017 年度日本語教育学会秋季大会

< 2015 >

[学会発表]

人文・社会科学系学術論文中の引用・解釈から見た日本語の論理的思考表現

人文・社会科学系論文指導教材開発をめぐる

発表者名：山本富美子・二通信子

学会等名：第四回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム (予稿集 p.191)

発表場所：中華人民共和国 延吉 延辺大学

[図書](計 1 件)

[図書]

< 2016 >

「文章表現の指導」

著者名：大島弥生 (徐敏民・近藤安月子主編) 『日語教学研究 日本学研究叢書』

出版社：外語教学与研究出版社 (中国・北京)

[産業財産権]

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：生天目 知美
ローマ字氏名：Nabatame, Tomomi
所属研究機関名：東京海洋大学
部局名：学術研究院
職名：准教授
研究者番号（8桁）：20549042

(2)研究協力者

研究協力者氏名：山本 富美子
ローマ字氏名：Yamamoto, Fumiko

研究協力者氏名：二通 信子
ローマ字氏名：Nitsu, Nobuko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。